

論文番号 22

担当

滋賀医科大学 福祉保健医学講座

題名 (原題/訳)

Predictor of death and vascular events in the elderly-The Perth Community Stroke Study

高齢者の死亡と循環器疾患発症の予測因子—パース地域脳卒中研究—

執筆者

Jamrozik K, Broadhurst RJ, Forbes S, et al.

掲載誌 (番号又は発行年月日)

Stroke 2000; 31: 863-868

キーワード

循環器疾患、コホート研究、高齢者、死亡率、西オーストラリア

要旨

背景

この研究の目的は高齢者の循環器疾患の危険因子を同定することである。著者らは西オーストラリアにおける地域ベースの症例・対照研究において、喫煙、調理後の食材への塩の添加、肉の頻回摂取、全脂肪乳の使用が脳卒中のリスクを上昇させ、逆に魚の摂取、2 drinks(20gのエタノール)までの飲酒がリスクを減少させることを報告した。本研究はその対照集団を4年間追跡したコホート研究である。対象者の年齢の中央値は75歳であり、短い追跡期間でも検討が可能と考えられた。

対象と方法

1989年2月から18ヶ月をかけてPCSS (Perth Community Stroke Study) の研究者は、人口約138,000人のパース北郊外の住民の脳卒中登録を実施した。同一地域から症例1人につき1~5人の比率で、性と年齢(5歳階級)をマッチさせたコントロールを選択した。本研究ではこのコントロール集団931人を1994年まで追跡した。追跡は死亡統計とのリンク、病院病歴データベースとの照合により実施した。

結果

931人のうち817人(88%)の追跡が可能であり、追跡終了時に198人(24%)が死亡し、そのうち96名が循環器疾患であった。更に死亡には至らなかった心筋梗塞が15件、脳卒中が30件あり、結局、141件の循環器疾患が126人に発症した。少なくとも1回以上の脳卒中を発症した者は46名であった。総死亡と関連する要因は、機能障害 (higher Rankin score); 相対危険度 2.30(95% C.I.:1.65-3.22)、心筋梗塞の既往; 1.98(1.34-2.19)、糖尿病 2.02(1.28-3.20)、20本を超える毎日喫煙 3.10(1.08-8.87)であった。循環器疾患死亡と関連する要因は、心筋梗塞の既往; 相対危険度 2.65(1.62-4.32)、糖尿病 2.41(1.32-4.41)、飲酒 0.47(0.30-0.77)、週4回を超える肉の摂取 0.62(0.39-0.97)であった。循環器疾患の発症と関連する要因は、女性; 相対危険度 0.60(95% C.I.:0.40-0.88)、心筋梗塞の既往 2.31(1.48-3.86)、糖尿病 2.79(1.66-4.69)、飲酒 0.60(0.39-0.91)、週4回を超える肉の摂取 0.60(0.40-0.90)、全脂肪乳の使用 0.63(0.40-0.98)であった。循環器疾患の初回発症と関連する要因は、機能障害 (higher Rankin score); 相対危険度 1.90(95% C.I.:1.11-3.27)、糖尿病 2.14(1.06-4.32)、週4回を超える肉の摂取 0.56(0.35-0.89)であった。ほとんどすべてのモデルで糖尿病は約2倍の相対危険度を示し、心筋梗塞の既往はリスク増加要因として、アルコール摂取は低下要因として検出された。週4回を超える肉の摂取は、むしろリスク低下要因であった。

結論

高齢者では生活習慣と循環器疾患の間には限定的な関連しか見出せなかった。飲酒の防御効果は既報の症例・対照研究の結果とほぼ同様であったが、肉の頻回摂取は逆に負のリスクとなっていた。健康な老後をすごし長寿を保つためには、健康増進対策はより若い年齢層から開始する必要があると思われる。